

# 令和元年度花巻市民芸術祭第13回文芸大会

## 一般の部 入選作品

### 【随筆】

\*作品募集の部

・芸術祭賞

「心のイーハトーボ」

多田 聡子

自分の家で生まれ育った私には実家と呼ぶものはありません。唯一そんな気分になれる所は母の生家でしょうか。大好きな祖父母はもうとうに亡いけれど、田瀬の地はいつだって私の心のイーハトーボです。

母の生家に建って遠く見渡せば、遠野の山並みがゆったりと連なり春は遅くまでその山肌に残雪が見られます。眼下にはきらきらと水面の輝く田瀬湖が広がり、空の近さを感じながら額縁のない大きな絵を楽しむことができるのです。

子どものころ泊りに行くと祖父母はそれぞれに小遣い銭をくれました。それは私が働くようになっても続き、亡くなるまで甘えたいのはここだけの話です。

その当時、母の生家では稲作に加えて葉たばこ・養蚕・酪農と全く多忙な毎日だったでしょうが、おかまいなしに押しかけて田瀬の自然の中に遊び回りました。

軒下の大きな蜂の巣が恐くて家に入れなかったこと、いろりの火にくべて食べた朝鮮松の実、沸きすぎた湯にスコップで雪を入れてもらった外風呂、高砂の人形そのままにバスが見えなくなるまで見送ってくれた祖父母の姿、それらは少しも色あせることはありません。

黄色の膜の張った牛の乳は濃くて甘くておいしかったなあ。祖母の作る干柿は串柿でちょっと酸っぱかったなあ。

物売りが来ると必ず買ってあげる祖母でした。「この長い門口をあがって来てくれたんだもの」と言うのです。それに対してケチな性分の母は「なんでもかんでも買わねんだ」とよく意見していました。

祖母にとっては最後の孫を見せに行って数ヶ月後に突然の別れがやってきました。それは晩秋の空のとても高い日でした。私の心のイーハトーボでは、小太りで色の黒い祖母がいつでも満面に笑みを浮かべています。

・優秀賞

## 「父のくれた言葉」

河津 詠太郎

今から数十年程前のこと、私は郷里の高校を出て、盛岡のある郵便局に採用が決まった。

父の同伴で駅のある隣村まで行き、その頃言う汽車を待った。その駅は今は当然のように無人駅だが、当時は数人の駅員が居て、客も結構いたものである。上りの汽車は釜石から来る。いくらか混んでは居たが、座席はあった。父と並んで座る。私は郷里から出たことが少なく、まして生家を離れて一人で暮らすことの不安や、就職と言う緊張感で、ともすれば無口だったように思う。花巻駅で乗り換え盛岡へと向かう。その間も会話らしい言葉は無かったと思う。

日常、あまり父と話すことも無かったし、家業が農業であってみれば、そんな父との時間はある筈も無く、まして当時は、ひそかにライバルか敵ぐらいの、父への感情もあり、自分から話しかけることも無かったように記憶する。父はそんな沈黙の私に、話のきっかけを探していたようだったが、やがて自身の兵隊での体験をぼつぼつと話し始めた。

「とにかく真面目にやることだ。誰か見ているもんだ」いろいろ話した上の結論めいた言葉だった。細かな記憶は無いが、戦争への召集を受け、戦地である中国の、山東省での活動、兵舎での規則や生活、上司の命令、等々だった。自分とはとにかく真面目に兵役を務めて、結果軍曹までの地位を得た、との自慢話ともとれる話だった。だが、今思えばあの言葉は、初めて送り出し、自立しようとする息子への、父親としての餞の言葉だったのだと思う。それは自分自身が父親になり、同じように我が子を送った時の心情を辿れば、疑う余地も無く、父の愛情そのものだったのだ。

父は兵役から帰還してからは、家業に励み、周囲の人々から「働き者」と称賛され、私は子供心に、ひそかに誇らしく思っていた。その父は胆管癌を罹病、八十歳で亡くなった。

・奨励賞

「姑への詫び状」

菅 マサ子

キャッキョッと庭で水遊びをして、騒いでいる四歳の二歳の孫の声が聞こえる。

私は何も知らないまま、嫁に来てから今年で五十年になる。三十三歳で夫と死別し、女手ひとつで四人の子供を育てあげた姑に頼りっぱなしであった。姑は無口で働き者で、孫達を大変、可愛がってくれた。

二十五年前、息子が東京の大学四年になり、夏休みに大手の会社に内定したと連絡が入り、夫も私も大喜び、卒業式はどうしようか、などと浮き浮きしていた、

そんなとき「東京さ勤めるのっか、帰ってこねのっか」と姑が聞いてきた。私は喜びに水を差されたような気がして「しかたねがいつちや、今の時代なもの」と言い放った。姑はびっくりしたように私を見ていたが、やがていつもより腰を曲げるようにして、畑の方へ出ていった。

九月、二度目の敬老会を目前にして、姑はくも膜下出血で倒れた。それから七か月間、昏睡状態が続き、私は後ろめたい思いで、許しを請うように毎日、病院へ通った。

翌年の三月末の夜、病院から危篤の知らせが入り駆けつけた。もう何も見えない、何も聞こえない姑の耳元で、息子が「ばあちゃん俺、帰ってくるから、帰ってくるからな」と叫んでいたのが、映画のワンシーンのように今でも思い出される。

あれから二十五年、息子は地元で勤めている。私は姑が亡くなった年齢と同じになった。どんなに孫の帰りを待っていたか、あのとき一言「二・三年したら、こっちの支社によこすって」と言っていたら、姑もがんばって長生きしていたかも知れないと、今でも悔やむ。

「その歳にならねば分からねんだ」が姑の口癖だったが、今の私には痛いほど分かる。

姑の歩けなかった道を私はこれから歩いて行く、もし天国に届けるポストがあるなら、あのときの詫びを書いて姑に出したい。

・佳作

### 「姉からの就職祝い」

有原 すみれ

昭和44年春、姉から進学と就職祝いにオルゴールをもらった。長方形の形をした縦8cm、横15cmの箱型で上にはパールがちゃんと載っている。蓋をあけると紅いビロードのジュエリーボックスになっていて、底にはプリンスオルゴールと書いてあった。

社会人初日、私の荷物はスーツケース一つと僅かな荷物だけである。我が家には車が無かったので、父の友人が運転する車に乗せてもらい、父も一緒についてきてくれた。

そこは隣町の街はずれにある開業医で、住み込みの人は私を含めて当時は4人いた。何日もしないうちに一人が辞めてしまい、給食担当と3歳上の人と3人になってしまった。

早起きの苦手な私だったが、5時には起床し2人で病棟の掃除・入院患者への配膳をすませる。日中は雑用であつという間に終わってしまう。夕方5時に仕事をやめて学校に行くのだがこの時間が一番苦手だった。

襖を開けて奥様に学校へ行く為の挨拶をするのだ。その日は、腿の内側にできた吹き出物が痛くて、きちんと正座しないまま挨拶をしてしまった。それを見た奥様に「挨拶もろくにできない」と注意された。おできが痛くて、と言えば良かったが言葉がでなかった。その日の授業は何も頭に入るはずもない。

それ以来、奥様のという言葉がズキズキと胸に突き刺さってくる。いつも東京生まれを自慢していた奥様から見たら、確かに世間知らずの田舎者といわれても仕方がない。

厭なことがあった日は、実家がこいしくなりオルゴールの蓋を開ける。哀しげな「エリーゼのために」が流れ、ますます家に帰りたくなったことを今でも思いだす。

4歳上の姉は社会人になっていたが、オルゴールはきっと奮発して買ってくれたに違いない。あれから50年も経ち、表面の金色の彫刻はくすんてきたが、音色はまだその時と変わらないままだ。

・佳作

## 「思い出の羅臼岳」

阿部 佐恵子

今、ひざサポーターの手離せない毎が続いている。

2か月ほど前から、ひざに違和感がある。痛みはそれ程ないのだが、段々とひざをかばうような歩き方になり、整形外科を受診した。結果は「ひざ関節炎」。何かのきっかけで炎症を起こし、ひざに水がたまって歩きにくいのだと説明を受けた。始めは週に一度、今は2週間に一度の通院が続いている。大好きな登山も今年はまだ無理だとあきらめている。

そんな時「にっぽん百名山」の放送があり、録画して、時間がある時にくり返し見ている。特に自分が登った山々は、映像に見覚えのある場所があり、ちょっとした瞬間に自分が歩いているような気持ちになる。

9月に「羅臼岳」の放送があった。私が北海道、岩尾別登山口から知床連山のひとつ羅臼岳(1661m)に登ったのは5年前の7月だった。花巻から十数名のツアーでフェリーを利用しての旅だった。山岳ガイドは地元湯本地区出身の大学生、ダイちゃん。

平成生まれの彼は固い南部せんべいとコカコーラが大好きでリュックの必需品と言う。年を重ねた私たちが歩きやすいように常に声を掛け、知り得る限りの花の名前を説明し、最後まで体調に気遣って先導してくれた。

あの日は前日までの雨が上がり、濃霧の中を出発。延々と続く樹林帯をぬけ、仙人坂を登り、大沢の雪渓を過ぎると楽しみにしていた一面のお花畑が広がっていた。ガスの切れ間に羅臼の街並みを望むころには、空のご機嫌はかなり良くなっていった。

頂きに近づくと風が強くなる。風に負けず頂上をめざす。強風の中、知床最高峰からの眺めは例えようのない絶景が待っていた。光る海、空の青さ、山々の緑。雲の上に浮かぶ国後島、斜里岳も目に焼き付けた。

下山後、北海道の恵みをお腹いっぱい頂いたのは言うまでもない。

・佳作

## 「イギリス海岸」

清水 嘉信

宮沢賢治の命日21日、白亜のイギリス海岸がくっきりと出現したと。ニュースがあった。

私の散歩コースのひとつでもあり先週あたりから見えるようになっていた。

今年も初めて見たイギリス海岸は気持のよいものであった。

幻の名所として自然にはあまり見ることが出来ないので少し得をした気分になつた。

あの場所はイギリス海岸が見えなくても天気の良い日は胡四王山から出る朝日はとてもきれいだ。また近くを走るJR釜石線、夏場の期間限定のSL蒸気機関車の気笛が聞こえると最高。

イギリス海岸をながめていると昔の記憶があきることなく何時もよみがえる。

岩手県北部の山村での小学生五年のとき、女性担任の先生が「よしのぶ君は宮沢賢治に似ているよ」と宮沢賢治物語の本の写真を見せてくれた。

嬉くなり舞い上ったことを記憶している。

先生は、春は校庭の脇にある桜の下で、夏は校舎の直ぐ後の川辺で、秋は栗拾い後に、冬は薪ストーブの廻りで、よく宮沢賢治の童話、イギリス海岸の話をしてくれた。

その地区は鉄道が通っていないため特に銀河鉄道の話は何回もリクエストをした。

それはそれは楽しい時間であった。

ある日突然、先生から特別な報告があり、「今日から先生の苗字が変わります、先生以上に賢治さんを好きな人と結婚しました。夢と幸せをくれるのが賢治さんですよ」と話をしてくれた。

宮沢賢治がイギリス海岸と名付けてくれなければただの北上川。私達はと宮沢賢治から夢と幸せをもらっているような気がする。

退職して十数年前からイギリス海岸の近くに在住して老後の幸を感じている昨今です。